

知的障害者施設における

レジャー・レクリエーションの実践
～ 楽しく豊かな生活をおくるには ～

大場 伸（東京都千葉福祉ホーム）

【キーワード】情報 選択 自遊 地域 QOL

1. はじめに

施設利用者の「街のあの喫茶店のマスターが作るブレンドコーヒーが飲みたい」という希望がある。これは「思い立ったら」「自分の好みで選び」「自分で行動し」「地域の人と一緒に」という当然のものにもかかわらず、「また今度」などと制約されることが多い。

このような希望に少しでも添うべく、施設の運営や援助を「利用者の生活」という視点から見直してきた、どこにでも見られるあたりまえの小さな実践の経過を報告する。

2. 施設の概要

当所は創立50年を超え、精神薄弱者更生（470名）と精神薄弱児（160名）施設からなる大規模施設である。また都立であることから地域との関係が薄い。

利用者は入所期間が長期化し、高齢化、重度（重複）化し、退所率が低下している。生活は、通学と作業訓練や各種療法等を中心に年間援助計画と日課で構成されている。

いわゆる余暇時間は地域社会とほぼ同じであるが、趣味活動は一般と比較して豊かとはいえず、年間行事や社会見学、外出等は長い間、訓練の一部としての性格を残していた。

平成3年から全職場の処遇上の問題点の洗い出し、改善提案を設けて「QOL運動」を展開してきており、その中にレジャーやレクリエーションに関することも含まれている。

3. QOL運動以降のレジャー・レクリエーション

【年間行事】 大規模で市街地になく、地域との関係が薄いことは、利用者の生活に支障をきたしやすいことであり、所内の行事も関係者を中心に行われてきたが、この不利な条件を逆に生かすために、行事のコンセプトを「スケールをメリットにする」「地域の行事に近づける」「自分で選んで自分遊ぶ」ということに変更した。

「さくらまつり」では、500m程の桜並木を中心に利用者と職員が竹藪を切り開いて造った「遊歩道」を利用したウオークラリーやレク・スポーツコーナーを設け、企画運営を袖ヶ浦市レクリエーション協会に依頼し、陶芸や手工芸、園芸の体験教室を設けた。

フリーマーケットと模擬店には、地域住民や社会教育団体等が出店、その他人形劇やバンド演奏、民謡のボランティアなどを依頼し、地域住民の直接参加を多くした。

これによって、好みに応じて遊ぶ場ができ、広報活動と口コミで広まり、地域住民が家族や小中学生のグループで多く参加するようになり、利用者と同様に遊んでいる。

このコンセプトは他の行事にも共通しており、「盆踊り・花火大会」は広大な敷地で打ち上げ花火を行い、太鼓グループや民謡指導、模擬店出店などの直接参加があり、地域の恒例行事になっている。さらに「夏まつり」に変え、日中から遊ぶことを増やしている。

「運動会」は、地域の運動会のようにするというので、繰り返される練習をやめ、ぶっつけ本番でも運営できるような、自由参加型のプログラムを多くしている。入・退場行進と選手宣誓を無くし、利用者代表の挨拶を壇上から行っている。

尚、いずれも事前申込みの必要はなく、開・閉会式を最小限にしている。

【外出】 社会見学と称して、バスを連ねて出かけていたが、できるだけ1～2台にし、さらにバス旅行と名称を変更し、より小グループの外出にするための方法を検討中である。

買い物指導として年間に二回、千葉市に出て、大きな買い物をするのが恒例であったが駅周辺や隣の駅周辺に数多く出かけることに変更し、経験を積むことで職員の付添い無しのグループや一人で日常的に出かけることを増やしてきている。

【旅行】 付添い職員の旅費の制限等で、100km以上の所や連泊が難しいことから、市で主催する「〇〇市民号」に参加したり、旅行会社が企画したツアーに参加することで職員の付添い無しで少しずつ遠方に行くことができてきている。外出と旅行共に行き先の選択や日程の立案、手続きに利用者が直接参加していることも増えてきている。

【その他の文化・スポーツ活動】 千葉県内の機関との関係を増すことで地域の関連行事やイベントの情報が増え、障害者専用のイベントの他に、一般のイベントに参加する機会も増えている。これは作業訓練や療育指導、クラブ活動などの励みにもなっている。

4. これまでの取り組みが及ぼした影響

QOL運動を契機に利用者の生活とその援助を見直してきたことで生活に幅が生まれてきた。このことにより、利用者個人に与えている影響に差はあろうが、例えば、・・・

Nさんは長期入所で高圧的な言動を身につけていたが、趣味に結びつけた外出を増やし個人の生活を充実する方向の援助に変えると付添い無しの一泊旅行で自信を持ち、身体障害ゆえに拒否していたスポーツ大会にも参加し、他の利用者に優しく接するようになった。

Aさんは就労に失敗して入所し、自信を失いかけていたが、企業の職場実習開始と共に就労時代と同程度の外出、宿泊旅行に付添い無しで出かけるようにしてきたところ、沖縄旅行の後に親族に久しぶりに電話を入れ、関係を回復する契機になる。

その他、地域に出かけたり、地域の方と出会うことが多くなると言葉使いや服装等に気を使うことが多くなること、外出に積極的になり、生活にリズムが出るなど様々である。

全国一斉ウオークラリーに市民として利用者が参加し始め、袖ヶ浦市レクリエーション協会が毎月一回、所でレク・スポーツ教室を開催し、初回到96名の利用者が参加した。

ボランティアの指導がある民謡クラブは、地域での発表の機会も多く、一番人気である。

5. これからの課題

地域で生活を営むことができれば、もっとレジャー・レクの機会は多い。知的障害ゆえにというよりも施設に入所していることで制限されることが多いと思われる。

また、地域と直結している小規模な施設であれば、自前のお祭りも運動会も必要なく、地域のものに個人として参加すれば良いことである。しかし、現実として630名の知的障害者を受け入れてくれる地域は無い。したがって施設を地域のものとして開放し、地域住民が個人として施設に出入りする機会を多くすることと、できるだけ利用者が個人として地域でレジャー・レクの活動ができるようにしていくことが必要である。

そのために知的障害を考慮したプログラムや財の開発も大切であろうが、「指導」といふ観点から離れてみると施設職員の役割は、障害者向けの専門的なレク指導よりもレジャー・レク情報の加工、提供方法の工夫、地域資源へのアクセスや利用者自身による企画・運営のサポート、レジャー・レク商品や施設、イベントの開発に中心が置かれるのではないかと思われる。多くのことは、他者に依頼し、普段の援助過程のなかで利用者がレジャー・レクを享受できるスキルの養成とマネジメントに比重を移すことが必要であろう。